

書評

野生動物の研究と管理技術 編 Theodore A. Bookhout

監修 日本野生動物医学会, 野生生物保護学会

編訳 鈴木正嗣

2001年 文永堂出版 20,000円+税

本書は、主に哺乳類と鳥類保全の「現場」に携わる人を対象に書かれた「マニュアル」である。原著初版の発行は1960年。しかし、本書を読んだ人は40年も版を重ねてきたことに心から納得するだろう。それだけの内容を備えたマニュアルである。旧版は見えていないが、この第5版の内容の新しさから、版によって大幅な書き直しをしていることもわかる。また、扱われている項目の広範囲さ、その適切さが素晴らしい。しかも、徹底した現場主義…。

まず全体を概観しよう。本書は大きく4つに分けられる。第1部にあたる「実験の設計とデータ処理」は3章からなり、調査を始める前に知っておくべき科学的方法論と統計の基礎などがまとめられている。現場向けマニュアルにも関わらず、科学的方法論と統計の手法の解説に各1章ずつ割り、しっかりと解説していることが、本書を他のマニュアルとは一線を画したものにしている。

本書の中核、第2部にあたる「野外および実験室でのテクニック」はなんと12もの章で構成されている。捕獲や麻酔の技術に始まり、性判別と年齢査定、生息数推定、生息地利用の測定、栄養分析などなど野外調査、実験に必要なありとあらゆる技術が解説されている。また、無難な解説でなく、担当著者の明確な主張が含まれている章も多い。たとえば「10. 脊椎動物による陸上の生息地と食物の利用の測定」では、各生息パッチで見られた個体数だけから求めた対象種の生息パッチ選択性を、保全提言に使うことの限界が示されている。ある鳥が特定の生息地に多く見られることから、その生息地が減少するとその鳥も減少するという結論は言いすぎなのだ。

第3部にあたる「個体群解析と管理」は、5つの章からなる。個体群生態学の基礎を実際のデータに結びつけながら手際良くまとめた章、増えすぎた動物、減りすぎた動物をどう保全していけばいいのか、保全計画のあり方、法律上の問題、被

害評価や防除法などについて説明した章が含まれる。

第4部にあたる「生息地の分析と管理」は8章からなり、動物の生息地の調査法と湿地、農地、森林などの管理方法に関する章が並んでいる。応用を強く意識した生息地管理の章の解説もさることながら、近年、この分野で重要な役割を果たしている地理情報システムを概説した章の説明も素晴らしい。

898ページの大著だが、章の最初には目次、章末には引用文献をまとめるなど、章別に拾い読みしやすい構成になっているのも、マニュアルとして優れた点だ。序文によると、各章は対象分野のオーソリティが必ず共著で執筆しており、かつ、章ごとに査読者がついている。信頼性の高い情報を提供したいという編者の徹底した姿勢がうかがわれる。

残念なのは、訳のもとになった第5版が1996年発行と少し古いことである。大部分問題ないと思うが、たとえば「2. データの分析」で最近この分野に頻出する統計手法TWINSPANやCART（分類・回帰樹木）などの説明がなかったり、「3. 野生動物の管理と研究における小型コンピュータの利用」には、（編訳者序文にも述べられているように）現状に合わない記述があるなど、新しい情報を別に入手しなければならない部分もある。また、訳書なので当たり前だが、後半の個体群や生息地管理の各章で紹介されている法制度などの情報が日本のものではない。現場主義という編者の意図を尊重した訳書にするためにも、補遺あるいは別章で、日本向けの情報を整理してほしい。

全体的な問題として、保全生態学の教科書では普通に登場する、群集や生態系を単位にした保全や遺伝学的な問題などの解説が抜けている点がある。「野生動物管理の本だから…」というのは研究者側の都合に過ぎない、と私は思う。保全を志す人たちが、まず本書から勉強を始めるという役割をこの本は担っているのだから。

しかし、以上の欠点を踏まえても、私は本書が保全に関係する研究機関、NGO、アセスメント関連会社、行政機関などに必須の1冊だと思う。そして、そこで仕事や研究を始める人が本書に書いてあることを理解し、できれば、そこで足りない部分を、（英語で書かれてはいるけれど）原著の最新版や本訳書の引用文献へと読み進み、その上で

---

研究や保全プロジェクトが進められるようになれば、本当にすばらしいことだと思う。

藤田 剛

(東京大学・農・生物多様性科学研究室)

---